

特集： 医療通訳の現状と今後のありかた Special Issue: The Present and Future of Healthcare Interpreting

川内 規会¹⁾、吉富 志津代²⁾、南谷 かおり³⁾
Kie Kawauchi¹⁾, Shizuyo Yoshitomi²⁾, Kaori Minamitani³⁾

1)青森県立保健大学

2)武庫川女子大学

3)りんくう総合医療センター

1)Aomori University of Health and Welfare,

2) Mukogawa Women's University,

3) Rinku General Medical Center

第1回日本医療通訳学会学術集会シンポジウムが2022年10月2日に開催された。本シンポジウムのテーマは「医療通訳の現状と今後のありかた」とし、医療通訳に関心のない分野の人たちにも、そもそも医療通訳とは何であるか、定義、現状、課題などについて概要を理解してもらった上で、どうして医療通訳が必要なのか、その環境整備のプロセスで気づかされる人権意識や新しい視点により、日本の医療環境や社会全体にどのような可能性が広がるのか、ともに考えていただける機会とした。

医療通訳という専門技術を持つ通訳者も、その立場によって多様な考え方が存在する。社会学でも、社会構成主義や当事者性という概念があり、ものの見え方やあり方は、その人の考え方や立場によって異なってくるとされている。そのため演題を「通訳者としての医療通訳者」、「外国人支援者としての医療通訳者」、「医療者としての医療通訳者」とし、演者にはそれぞれの立場から医療通訳について話題提供をしていただいた。

「通訳者としての医療通訳者」は、患者と医療機関から相対的に独立しており、中立的な立場である。服部しのぶ氏は、医療通訳の養成や質の保証、制度について触れながら、医療通訳の役割はどこまで必要かといった現状の課題と、今後の医療通訳者のあり方について示された。

「外国人支援者としての医療通訳者」は、もともと立場の弱い患者に配慮してその視点に立ち、同調しがちである。濱井妙子氏は、外国人支援者の立場から、直訳ではなく内容を付け足す医療通訳者の介入を、文化的状況を考慮した正しい通訳ととるか、逸脱ととるかが課題であることも述べ、その役割について発表された。

「医療者としての医療通訳者」は、医療機関の一員として、医療機関の視点に立つ医療通訳者である。押味貴之氏は、まずは医療通訳者の認証制度とその必要性について解説し、そして医療機関で求められる理想の医療通訳者像について話された。

以上のように、一つの視点から医療通訳を語るのではなく、様々な立場からの医療通訳像とそれらを巡る議論を展開し、参加者が医療通訳の現状と課題について探り合えるシンポジウムとなった。

また、医療通訳を切り口として、医療環境のあり方や、ひいては日本社会そのものの人権意識の醸成にもつながるような多くの気づきがあり、分野を超えた研究における共通の課題にも通じる道筋を感じられる内容であった。

研究資金

該当なし

利益相反自己申告

該当なし